日本现代文学
精品注释丛书

失乐园

下

日文版

中国日语教学研究会推荐

[日本]渡边淳一著 刘芳亮 费建华 注释 胡振平 审校

译林出版社

日本现代文学
精品注释丛书

失乐园

下

日文版

[日本]渡边淳一著 刘芳亮 费建华 注释 胡振平 审校

译林出版社

图书在版编目(CIP)数据

失乐园／（日）渡边淳一著；刘芳亮，费建华注释.
-南京：译林出版社，2004.1
（日本现代文学精品注释丛书）
书名原文：失樂園
ISBN 7-80657-564-2

Ⅰ.失… Ⅱ.①渡… ②刘… ①费… Ⅲ.长篇小说-日本
-现代-日本 Ⅳ.I313.45

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2003）第 031967 号

Copyright © 1997 by 渡边淳一.
Japanese reprint rights in China arranged with WATANABE Jun'ichi through Japan UNI Agency Inc., Tokyo.
登记号 图字：10-2002-001号

书　　名 失乐园
作　　者 [日本]渡边淳一
注　　释 刘芳亮　费建华
审　　校 胡振平
责任编辑 张远帆
原文出版 講談社，1997
出版发行 译林出版社
电子信箱 yilin@yilin.com
网　　址 http://www.yilin.com
地　　址 南京湖南路 47 号（邮编 210009）
集团地址 江苏出版集团（南京中央路 165 号 210009）
集团网址 凤凰出版传媒网 http://www.ppm.cn
印　　刷 南京通达彩印有限公司
开　　本 850×1168 毫米　1/32
印　　张 16.375
插　　页 8
版　　次 2004 年 1 月第 1 版　2004 年 1 月第 1 次印刷
书　　号 ISBN 7-80657-564-2/I·431
定　　价 27.50 元（上、下卷）
译林版图书若有印装错误可向承印厂调换

下

部

春(しゅん)陰(いん)

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

季節の変り目は、人事にもさまざまな変化をもたらしてくる。とくに冬から春への移行期は、万物の精気が野に満ちあふれるだけに、人々の軀[1]や心にも影響を与えるようである。

事実、二月半ばから三月にかけて、久木のまわりにも思いがけないことがいくつか起きた。

そのひとつは、一歳年上で同期入社の出世頭と思われた水口が肺癌で入院したことである。

昨年暮れ、突然、本社から子会社のマロン社に移ることになり、いささか意気消沈しているときであっただけに二重の衝撃だったが、発見が早かったのですぐ手術をして、一旦は落着いているようである。

久木は見舞いに行きたいと思ったが、家族から、いましばらくあとにして欲しい、という希望もあって、まだ行かずにいる。

水口の発病も、やはり春の精気に体力を吸いとられた結果なのか。しかし本社のライン[2]を外れた途端に倒れたところをみると、人事も影響しているのかもしれない。

むろん、それが病気の直接の原因というわけではないが、これまでもポジション[3]を失い、仕事にやり甲斐を失ったときに病気になる者が多かっただけに、満更、無関係とも思えない。

いずれにせよ、同じ年代の者が病気で倒れると、自分もそろそろそんな年齢なのかと不安に

---

① 軀(からだ)/身体。　② ライン(line)/(企业)垂直系统的部门。　③ ポジション(position)/职位。

なってくる。

辛い、久木はいまのところ、とくに悪いところはないが、凜子との関係は、いよいよ[1]抜き差[2]しならぬところまですすんできている。

[3]不思議なことに、男女の関係は月日とともに徐々に深まるというより、ひとつのことをきっかけに段階的に深まるようである。たとえば二人の場合、ともに鎌倉へ行き、続いて箱根へ出かけ、さらには凜子の父の通夜の夜に強引にホテルで逢った。そんな大胆な、まわりの人々を欺く逢瀬の度に、二人のあいだは一段と深く、離れ難いものになっていく。そしていま、さらに二人の絆が強くなったのは、二月の半ば、二人で中禅寺湖に行き、そのまま帰らなかったことが、きっかけになったことはたしかである。

しかし夫の姪の結婚式にも出ず、二日も家を空けたまま戻らなかった、そんな人妻の行為が世間的に許されるわけもない。

もしかして家に帰ったあと、夫に激しく叱られ、大喧嘩になったのではないか。

久木はそのことが気懸り[4]で夜も眠れなかったが、その二日あと、渋谷の部屋で逢ってみると、凜子は意外に元気であった。

だがそれはあくまで表面で、実際は大変な問題が起きていたようである。

凜子の話によると、その夜、十一時を過ぎて家に戻ると、夫は起きていたが、凜子が帰ったことを告げても返事もせず、本を読み続けていた。

瞬間、凜子は、夫の怒りが尋常でないことを察したが、それでも一応、吹雪[5]で帰れなくて、披露宴に出られなかったことを詫びた。それでも夫は無言のままなので、仕方なく二階の部屋に着替えに行こうとした途端、「待て……」という言葉とともに、夫の声が凜子の背に突き刺さってきた。

---

① いよいよ/愈发，越来越。（副词） ② 抜き差しならぬ/进退两难，一筹莫展。 ③ 不思議なことに/不可思议的是……。（惯用句，形式名词こと概括前面修饰语的内容，に是格助词。） ④ 気懸り（きがかり）/担心。 ⑤ 吹雪（ふぶき）/暴风雪。

「お前の、やっていることは、全部わかっている」

驚いて凜子が振り向くと、「泊った相手も、場所も知っている」[1]といいきった。

正直いって、凜子の話をそこまできいたとき、久木は脳天を打たれたような衝撃を受けた。

これまで、凜子や衣川から断片的にきいたところでは、凜子の夫は四十代後半で医学部の教授をしている。すらりとして[2]ハンサムで、外見的には非の打ちどころがないが、秀才にまま見かける冷淡で独善的なところがあり、男女のことや世智には、あまりたけていないようである。

そんな男が、妻の浮気相手まで調べあげるものなのか。久木には信じられないが、凜子は淡々と告げる。

「あなたの名前も、久木祥一郎と、はっきり知ってたわ」

「どうして、そこまで……」

「あの人は、意外に嫉妬深いから……」

それでも、自分の妻の浮気相手の名前まで探りだすのは、容易なことではない。

「われわれのあとでも尾けていたのか、それとも探偵にでも頼んだのか」

「そんなことをしなくても、知ろうと思えばわかるわ。あなたから手紙をもらったでしょう。それに、わたしの手帳にも、ときどき、あなたの名前や会社をメモしたことがあるから」

「それを、彼が見たの？」

「むろん、見られないように隠していたわ。でも、初めのころはまだ不用心だったし、最近、なんとなく見られたような気がしていたので」

「しかし、君のほうがいつも家にいるのだろう」

「いますけど、暮からずいぶん空けたから……」

---

① 脳天を打たれた/被当头一击。 ② すらりとして/（高个、胖瘦适中）身材极好。 ③ 非の打ちどころがない/找不到缺点，无可非议。（惯用句） ④ 知ろうと思えば/如果想知道的话。（惯用句，推量助动词う接在动词未然形后，接续助词ば接在动词假定形后表示假定。） ⑤ 不用心/不留神，不小心。

L0034/05

去年の暮、凜子の父が亡くなってから、凜子は横浜の実家に戻っていることが多かったが、その間に、彼女の夫は徹底的に妻に関わることを調べあげたのだろうか。

「それに、今度は旅館の名前をいったでしょう。一泊ならまだよかったけど、二日目も泊ったから、フロントにでも電話をしていろいろきいたのかもしれないわ」

たしかに、あの吹雪の夜に泊っている客はかぎられていたし、緊急のときだけに、旅館も比較的簡単に、外からの問い合わせに応じることはありうる。

「でも、本当に、彼がそういったの？」

「こんなこと、嘘をいっても仕方がないでしょう」

いままで、世間知らず[1]のお人好し[2]のように思っていた人物が、急に牙をむき出し襲いかかってくるような、不気味さ[3]を覚える。

「それで、彼はなんと……」

「遊びたければ勝手に遊べ、お前は不潔で淫蕩な女だと……」

久木は、自分のことをいわれたような気がして黙っていると、凜子はひとつ溜息をついて、

「お前を憎んでいるけど、別れてはやらない、といわれたわ」

一瞬、久木は凜子のいっていることがわからなかった。いや、凜子の口をかりていっている、凜子の夫の気持がわからない。

もし妻を憎んでいるのなら、罵倒したうえに早々別れるのではないか。それをなぜいままでどおり、夫婦でい続けようとするのか。

「わからない……」

久木がつぶやくと、凜子もうなずいて、

「わたしもわからないわ。でも、あの人はそれで復讐しているんだわ」

---

① 世間知らず/不懂世故，阅历浅。　② お人好し/老好人，忠厚老实的人。
③ 不気味/令人毛骨悚然，令人害怕。

「復讐って、君に？」
「憎くて許せないから、離婚はせず、いつまでも結婚という枠に閉じこめておこうと……」
そんな復讐の仕方もあるのかと、久木は半ば驚き、半ば納得するが、それでもやはりわからない。
「でも男なら、まず怒鳴るとか、殴るとか、そうするものだろう」
「あの人は、そういうことはしないわ」
「じゃあ、君がいくら外で遊んでも、なにもいわず見逃す？」
「見逃すというより、家に閉じこめたまま冷たく眺めているだけよ。それにたとえ見逃しても、わたしが遊び歩いたら、まわりの人からいろいろいわれるでしょう。母や兄はもちろん、向こうのご両親や親戚からも……。離婚をしないかぎり、妻は妻ですから」
そういわれると、たしかに凜子の夫が考えている復讐の意味も、わからぬわけではない。
「でも、そこまでいったら同じ家にいても仕方がないだろう。君も、彼のために家事をする気はおきないだろうし、向こうも家で食事などしづらい」
「その点は大丈夫よ。あの人の実家は中野で、これまでもよくお母さんのところで食べていたし、大学には自分の部屋があるし、家でも、前から寝室は別々だったから」
「それ、いつごろから？」
「もう、一年以上になるわ」
一年前というと、久木と凜子と、二人の仲が急速にすすんだときだが、そのころから凜子達夫婦の仲は崩れていたということか。
「それで、どうする。このままでいいの？」
「あなたは、どうなの？」

---

① 納得する/理解，领会。　② 冷たく眺めている/冷眼旁观。

逆に凜子にきき返されて、久木は思わず息をのむ。

いま即座に、相手を満足させる返事はできそうもないが、二人のあいだがもはや切羽詰まった、ぎりぎりのところまできていることはたしかである。

久木は無言のまま、改めて中禅寺湖畔に閉じこめられたあと、家に戻ったときのことを思い返す。

あの夜、久木が家に戻ったときも十一時を過ぎていたが、妻はまだ起きていた。

といっても、いつものとおり妻は迎えに出てこないので、そのまま書斎を兼ねている自分の部屋へ行き、上衣を脱ぎ、身軽なガウンに着替えながら考えた。

これから茶の間へ行って妻と顔を合わせたら、昨夜のことから気まずい雰囲気になり、争いがおきることは避けられそうもない。そんなことになるくらいなら、いっそこのまま疲れたふりをして休もうか。実際、情事のあとで疲れていたし、これから帰れなかったいい訳をするのも億劫である。

しかし、いまじらをきったところで、いずれ明日になれば顔を合わせなければならないから、問題を先送りしても面倒になるだけである。それよりむしろ今夜のうちに、仕事が忙しかったとでもいって、謝っておいたほうが無難かもしれない。

久木は気をとり直して立ち上り、鏡を覗いて、とくに変ったところがないことをたしかめてから茶の間へ行った。

思ったとおり、妻はソファーに坐ったままテレビを見ていたが、久木の姿を見て、「お帰りなさい」と、小声でいった。久木はそれにうなずきながら、妻が意外におだやかなのに安堵して横の椅子に坐り、「疲れた」と、ひとつ欠伸をした。

「昨夜、帰るつもりだったが、どうしても仕事が終らなくて、今日までかかってしまった」

---

① できそうもない/好像不能。（样态助动词そうだ接在动词连用形后面，表示样态，否定形常用そうもない或そうにない。） ② 切羽詰まる/被逼得走投无路，临到紧急关头。 ③ 白を切った/装作不知，假装不知道。（惯用句）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

妻には、京都のお寺と博物館に、資料を集めに行ってくると、告げていた。
もっとも、その名目で何度か凛子との小旅行を重ねてきているだけに気[①]がひける。
「昨日、連絡しようと思ったけど、酔って眠ってしまったものだから……」
久木はそこでいま一度、軽く欠伸をして、テーブルの上の煙草をとりかけたとき、妻がテレビを消して振り向いた。
「そんなに、無理しなくてもいいわ」
「無理？」
妻はゆっくりとうなずくと、テーブルの上にあった茶碗を両手でつつみながら、
「わたしたち、別れましょうか。そのほうがいいでしょう」
寝耳に水とは、まさにこのことであった。まったく予想だにしなかったことが、いま妻の口から洩れている。
「いま別れたほうが、わたしは楽だし、あなたもすっきりするでしょう」
妻の言葉をききながら、久木はまだ冗談か、戯れかと思っていたが、妻はさらに続ける。
「もう、こんな年齢になって、お互い無理することもないわ」
普段から、妻は大声で叫んだり、怒ることはなかった。たとえ不満があるときでも要点だけを簡潔にいって、あとは無関心な態度である。
久木はそれを、妻の生来のおおらかさ[②]だと思っていたが、今夜はそれとはいささか異る。
いつもよりさらに静かに、おだやかに話すところに、深く考えた末の、容易ならぬ[③]決断が含まれているようである。
「しかし、どうして……」
久木は手に持った煙草に火をつけることも忘れて、妻にきき返す。

---

① 気が引ける/感觉寒碜，羞愧，不好意思。（惯用句） ② おおらかさ/生性宽厚。（结尾词さ接在形容词、形容动词的词干后构成名词，表示程度或状态。） ③ 容易ならぬ/不同寻常的决断。（ならむ是文语助动词なり的否定形。）

「そんなことを突然いわれても、困る」
「別に困ることはないでしょう。理由は、あなたが一番よく知っているのだから」
妻に見詰められて、久木は思わず顔をそむける。
あるいは、と思っていたが、妻はやはり凜子のことを知っていたのか。ともかくこれまでは、そんな気配は一切見せず、「あなたはあなた、わたしはわたし」という淡々とした態度をとり続け、それはそれで好都合だと思っていたが、すべて妻に見抜かれていたとすると読みが甘かったことになる。
「でも、なにも、いま急にそんなことを……」
「急にではないわ、遅すぎるくらいよ。いま別れて一緒になってあげないと、あの人も可哀相だわ」
「あの人って？」
「あなたがこれほど熱中しているのだから、余程好きなのでしょう」
憎らしいほど、妻の声はおだやかで落着いている。
「わたしのことならいいのよ。心配しないで、大丈夫ですから」
これまでも、久木は妻との離婚を考えなかったわけではない。結婚して七、八年経ち、そろそろ倦怠期が訪れたとき、さらにそのあと、別の女性と親しくなったときにも、もし妻と別れて一人になれたら、と思ったことはある。とくに凜子を知ってからは、より具体的に離婚を考え、彼女と結婚することまで頭に描いてもいた。
だが現実に離婚となると、さまざまな問題が立ちふさがっている。まず、これといって欠点もない妻にどう別れ話を切り出すのか。そして一人娘の知佳にどういって理解してもらうか。さらにいえば、これまで築いてきた家庭を完全に壊し、新しい家庭をゼロから築いていく

---

① 「あなたはあなた、わたしはわたし」/"你是你，我是我，我们井水不犯河水"。
② 訪れた/(……期)来临了。　③ これといって/具体地指出。　④ ゼロ(zero)/零。

だけの意欲があるのか。それにはいささか年齢をとりすぎ、いまの生活に馴染みすぎているのではないか。そしてなによりも、凜子がきちんと離婚して自分と一緒になってくれるのか。

それらのことを考えると、一時の熱い思いも冷め、やはりいまの家庭というしがらみを背負ったまま、逢いたいときに逢うほうが無難で、まわりにも迷惑をかけない生き方だと思ってしまう。

結局、この半年間は、離婚して凜子と一緒になろうという熱い思いと、大人げないことはしないでおこうという醒めた思いとのせめぎ合いで、一方が押しては返し、返しては押すという状態が続いていた。

だがこのせめぎ合いのなかでひとつだけ、妻の心という、最も大きなものを忘れていたようである。いや、忘れていたというより、正確にいうと、彼女の気持は昔から同じで変ることはないと、たかをくくっていたのである。

たしかに考えてみると、これまで妻に別れることをいいだせなかったのも、離婚は難しいと思っていたのも、「妻は自分を愛していて別れたくないのだ」という思い込みがあったからである。それだけは昔も今も変らないと信じきっていた。

だがいま、その妻の口から、「別れましょう」といわれては、これまでの久木の考えは、根底からくつがえらざるをえない。

まさか、妻が自分のほうから別れ話をいいだすとは、夢にも思っていなかった。

「いいでしょう……」

離婚を促す妻の声は爽やかで、もはや迷いも翳りもなさそうである。

妻としては充分考えた末の結論かもしれないが、久木にとってはあまりに突然すぎて即座に答えられない。

---

① しがらみを背負ったまま/保持着（家庭）这个羁绊。　② 無難（ぶなん）/说得过去。　③ ~と~とのせめぎ合いで/两种想法僵持不下。　④ 押しては返し、返しては押す/按下葫芦起来瓢，此起彼伏。

ともかくその夜はそのまま休み、翌朝、少し早目に起きて妻の顔を窺ったが、表面的にはいつもと変わるところはなく、淡々と朝食の支度をしている。

もしかすると[1]、昨夜のことは遊び過ぎる夫を戒めるための冗談であったのか。そうも思いながら朝食を終え、会社に出かけようと立上った途端、妻がつぶやいた。

「昨夜のこと、忘れないで下さいね」

一瞬、久木は振り返ったが、妻はなにごともなかったように[2]食器を流しに運ぶ。

「本気か?」と念をおしかけたが、すぐ妻は蛇口をひねって水を流し、食器を洗いはじめたので、久木はあきらめて玄関へ向かう。そこで靴をはいて振り返ったが、妻が見送りにくる気配はなく、久木は仕方なくドアを開けて外へ出た。

空は晴れているが大気は軽く湿気を帯び、芽ぶき出した梢とともに春が近いことを思わせる。

そんな朝の大気のなかを、久木はゆっくりと私鉄の駅へ向かって歩きながら、改めて、いま自分が、離婚を迫られていることを思い出す。

正直いって、これまで離婚などは自分とは無縁のことだと思っていたが、気がつくといつのまにかその当事者になっている。久木はその立場の激変にうろたえながら心の中でつぶやく。

「それにしても、妻は本気なのか……」

半信半疑のまま電車に揺られて会社に向かううちに、ますますわからなくなり、駅に着いたところで、公衆電話から娘のところへ電話をしてみる。

娘の知佳は結婚して二年目だが勤めていないので、この時間は家にいるはずである。

電話ボックスに入り、気持をしずめてからナンバーを押すと、すぐ娘の声が返ってくる。

「どうしたの、こんなに早く」

---

①もしかすると~或许，说不定。　② 何事もなかったように/若无其事地。
③ いつのまにか/不知不觉，不知什么时候。（相当于知らないうちに。）

「いや、ちょっとね」
久木は曖昧に答えてから、思い出したようにいってみる。
「実は、お母さんが別れようといいだしてね」
「やっぱり、ママ話したのね」
驚くかと思ったが、娘の声は意外に落着いている。それどころか、「やっぱり」というところをみると、娘はすでに妻からきかされていたのかもしれない。
久木はなにか、自分だけ除け者にされていたような気がしながら、きき返す。
「お前、知っていたのか？」
「もちろん、ママからいろいろきいていたから。それで、お父さん、どうするの？」
「どうって……」
「でも、ママは本気で別れる気よ」
娘にあっさりといわれて、久木はさらに慌てる。
「お前、ママとパパが別れてもいいのか？」
「そりゃ、いつまでも仲良くしていて欲しいわ。でも、パパはママを愛していないのでしょう。外に好きな人がいて、本当はその人と一緒になりたいのでしょう」
妻はそんなことまで娘に話していたのかと、久木は改めて驚く。
「好きでもないのに、一緒にいるのは、よくないわ」
知佳のいうことはよくわかるが、現実の夫婦のすべてが愛し合っているわけでも、好きなわけでもない。なかにはかなり飽きたり、冷めている夫婦もいるはずだが、といって、それだけですぐ別れられないのが、夫婦というものである。
「じゃあ、お前も賛成なのか」

---

① きかされていた/きく的使被役态，有被迫、不得已的意思。 ② 除け者/被排挤出去的人。 ③ どうって/反问对方“你说怎么办”。 ④ といって/虽说。

「だって、そのほうが、お互いのためでしょう」
「しかし、これまで長くやってきたのだから……」
「そんなことをいっても、パパが悪いんだから仕方がないでしょう」
そういわれると、久木に反論の余地はない。
「ママはもう疲れたのよ」
「しかし、これから一人でやっていくつもりなのかな」
「もちろん、ママは一人になるのだから、できるだけお家やお金を残してあげてね」
当然とはいいながら、こういう事態になると、やはり娘は母親のほうにつくものなのか。久木は裏切られたような気がして、いってみる。
「お前は、反対するかとおもったけど」
「だって、パパとママのことでしょう」
たしかに嫁いだ娘にとっては、親のことはあまり関係ないのかもしれない。
「わたしのことなら大丈夫だから、安心して」
久木が家を忘れて遊び歩いているあいだに、妻も娘も、ともに強く、逞しく成長したようである。

凜子と久木と、互いの告白話をきき終えたところで、二人はなぜともなく顔を見合わせて苦笑した。
実際、いまとなっては嘆くことも悲しむことも、ましてや大声で笑うこともできない。せいぜい軽く苦笑するのが、唯一の残された道のようである。
ともかく、いま二人は予想もしていなかった岐路に立たされているようだが、それが各々正

① ～とはいいながら/虽说是……。　② なぜともなく/也没有一定的理由，并不为什么。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com